

1) 辞典の位置と性格

—ある日本語研究者の履歴書—

どんな人にもなにかの歴史がある。山形県の鶴岡市に生まれ育った関係で、庄内弁という方言文化にとっぷりとひたつた。姉の証言によれば、築後百年かという古びた平屋のはずれに位置する小部屋の方角から、朝になると時折ラジオのスポーツ放送が聞こえてきたという。たいてい大相撲や野球の早慶戦などの実況中継だったそうだ。信憑性にとぼしいこの伝説的な逸話に、もしも一片の真実がひそんでいるとすれば、思いあたるふしがまったくないわけではない。子供心にも、歯切れのいい志村正順アナウンサーの東京弁にあこがれていたらしいから、ひよつとすると、厠で機の熱すのを待つ閑な時間に、その名調子をまねてみては人知れず得意になつている声が近隣にもれていたのかもしれない。

長じて大学進学のため上京する前、受験勉強よりも東京ことばの習得に力を入れたことはよく覚えていて。NHKの『発音アクセント辞典』のページをめくりながら、自分の想定する標準アクセントと違う項目に印をつけて丸暗記するほどの熱の入れようだったにちがいない。きっと都会の人間に、ことばのこ

とでとやかに言われたくなかつたのだろう。

後年、NHKラジオの「日曜喫茶室」という番組で、そんな子供時代の数々の奇行を臆面もなく披露した折には、安野光雅画伯や文筆家の林望先生ら出演者のなごやかな憫笑に包まれた。図書新聞の特集「中村明の仕事」では、詩人・小説家の三木卓氏に書評の一文中で、例のアクセント丸暗記事件を、学者の「心意気」などと、思いもかけず好意的に評していただいた。今にして思うと、そんな大それた美談ではなく、ことばに対する異常なまでの執拗なこだわり的一端にすぎなかつたような気がする。

さらに勘ぐれば、早稲田の国文科に進学し、文章心理学の開祖、波多野完治先生の薫陶を受けて文体論を研究テーマに選んだのも、そのまま大学院に進み、時枝誠記教授の国語学研究室に在籍して国語美論をかじり、当時執筆中だったはずの『文章研究序説』の理念にふれたのも、同じ線上にある。

それどころか、細々と研究者生活に入つてから今日までの自分の著作をふりかえつてみても、ことばの呪縛から解き放たれた時期はなかつたようだ。国立国語研究所の研究報告書として秀英出版から出た『比喩表現の理論と分類』、岩波書店刊行の『日本語レトリックの体系』と『日本語文体論』、あるいは明治書院の『文体論の展開』などの学術書はもちろん、筑摩書房の『作

▼この辞典の位置と性格

家の文体『名文』に始まる数々の一般書から、角川書店の『比喩表現辞典』、東京堂出版の『感情表現辞典』『感覚表現辞典』、筑摩書房の『人物表現辞典』、岩波書店の『日本の作家 名表現辞典』『日本語 笑いの技法辞典』などの表現辞典類に至るまで、ひたすら言語作品での表現のあり方、すなわち、文学における(ことば)のふるまいを探る夢を追ってさまよいながら、それなりに一筋の生き方を貫いてきたようにも思える。八十のはしたを忘れそうなの年齢に達してなお、ある意味では、幼時からの業をずうっとひききつづけていると見られないわけではない。

学籍を離れてしばらく国際基督教大学で外国人学生に対する日本語教育に携わったあと、運に恵まれて、当時、現代語研究のメッカと目されていた国立国語研究所に職を得、以降十数年間、錚錚たる研究者たちと一見無駄なおしゃべりを楽しみなながら、おのずと(ことば)と真正面から向き合う贅沢な日々を送ることになる。そんなある日、直属の部長と室長にあたる二人の上司に誘われ、生まれて初めて国語辞典というものを手を出す。それまでの読んで批判する立場から、今度は書いて批判される立場に回る、はずだった。

稿料はいつの世も神秘的に一項目あたりビール一本の値段らしく、その頃は六十円。「運搬」という語に「通常、物に対してた。酔うほどに頭が冴え、辞典は一冊で間に合うのが理想という到達目標が浮かんだ。通常の国語辞典が担う解釈辞典という要素を堅持し、そこに表現辞典的な性格を充実させ、さらに漢字辞典や百科事典としてもひととおり役立つ総合的な日本語辞典をめざす、そんなラフなスケッチを描いた。

やがて時至り、九段の隠れ家めいた一室で森岡健二御大以下、編集委員が一同しらふで集う、第一回の編集会議がスタートした。満を持した若造の素人ならではの突拍子もない思いつきに、皆があつげにとられ、啞然としている間に議事は着々と進んだ。はつとわれに返ったころには、もうその編集作業に入っていたかもしれない。井上ひさしがいち早く察知したらしく、「新しい辞典の噂」という一文を草して、この一風変わった『集英社国語辞典』に対する奇妙な期待を語った。

まず国語項目を充実させたい。和語を基層とし、漢語や外来語を外層とする重層的な言語文化の中を生きてきた日本人の思考の中核をなしているからだ。単語の運用をなめらかにする助詞や助動詞の機能を詳細に記述したほか、言語項目・表現項目を指定し、「意味」「敬語」「言語」「比喩」「表現」「文章」「文体」「レトリック」などに何十行というスペースを割いて詳細に記述したのはそのためである。表現面の強化としては、各分野の専門

▼この辞典の位置と性格

用い、人には使わない」という使用制限を書こうと思いついたのが運の尽きで、いろいろ調べているうちに「病人運搬車」という用法のあることを発見してしまい、その注記を断念するまでに四日を費やした。この間の日当はなんと十五円。ところが、幸か不幸か某有名出版社のその企画は、なぜか途中で雲散霧消、狐につままれたように、ビールも泡と消えた。あれは夏の夜の夢だったのか知らん?

しばらくして研究所の平所員の身分で角川書店から国語辞典の編集委員の話が舞いこむ。國學院大學の学長吉川泰雄、成城大学の次期学長山田俊雄という代表編者らの末席に連なっているときをしゃべっていると、近くの旅館で宴が始まり、いつのまにか新宿のバーの客になっていて、いつ乗り込んだのか気がつく。車が自宅の門前に到着している。この企画はやがて『角川新国語辞典』となつてまちがいに世に出るのだが、あいう夢のような優雅な時代が無性に懐かしい。

しばらくして、大辞典の編者、松村明と名前が似ているせいで混同されたのか、この若き素人に今度は集英社から企画のスタートする前に声がかかり、ついその気になつてしまった。新しい国語辞典のイメージを求めて、いい知恵が出るようにという配慮か、編集プロダクションの代表格の識者と酒場をめぐつ語の表示、女性語・幼児語・方言などの位相の指示ほか、古語・雅語・文章語・口頭語・俗語といった文体的なレベルを示し、各語に標準アクセントを表示して発音面にも配慮した。

収録語数も欲張つて、漢字母項目を延べ三、五〇〇収録し、いわゆるカタカナ語を二二、〇〇〇項目、別にABC略語を一、九〇〇項目収録した。それでも、人が引いて調べたいことはまだまだある。辞書を引いて一番がっかりするのは、そのことばが載っていないときだろう。国語辞典の分を超えて、知的生活に一冊で役立つ日本語辞典となれば、国語項目だけではなく、現代人に必要な範囲のいわゆる社会語を含む百科項目も収載することが必要だ。歴史的な事件の名称や主要な地名・人名・書名を網羅したい。仮に各分野の専門辞典が百冊並んでいる家庭でも、知らない単語がそれぞれどの辞典に載っているかを調べるための索引代わりの辞典がもう一冊要る。国語辞典という名のこの日本語辞典は、そういう役割も果たしたい。「サポテン」の肥料や「穴熊」の手順を調べるために国語辞典を引くほどの楽天主家はめつたにいないから、詳しい説明はそれぞれの専門辞典にゆだねる。つまり、軽症の場合は適切な診断・治療を実施し、重症や難病の患者は応急処置をほどこしたうえで各専門の病院が大規模な総合病院に送り込む「ホームドクター」になぞ

らえると、理想の国語辞典の任務はわかりやすい。

その企画でもスペースの関係で断念したが、もし可能であれば国語辞典で記述しておきたい情報はまだある。明治書院から公刊した一冊、「文章プロのための」という偉そうなツノガキを冠した『日本語表現活用辞典』では、「けわしい」という形容詞の項目に「山道・表情・声・目つき・前途・情勢」と続け、「こつ」という名詞の項目に、(運転・上達)の「こつ」を(習得する・つかむ・身につける)と多くの例を添えて、コロケーション、語の慣用的な結びつきを示したのもその一つだ。また、集英社から出した『漢字を正しく使い分ける辞典』で、「かえる」という項目で「変/換/替/代」、「はね」という項目で「羽/翅/羽根」を掲げ、それぞれ漢字の使い分けを説明したのも同様である。

ことばにはそれぞれ、何を指し示すかという「意味」と、その情報がどういうニュアンスで相手に伝わるかという「語感」とがそなわっているが、国語辞典では必然的にことばの「意味」を説明するのが中心となり、「語感」という微妙なところまでなかなか手が届かない。だが、解釈辞典に表現辞典的要素を加えるととなると、この「語感」の問題は避けて通れない。そこで、国語辞典で断念したその「語感」については、岩波書店からずばり『日本語 語感の辞典』と題する、本邦初のそれ専門の辞典を別に刊

らないことばの意味を調べる目的で項目を引き出す際の、いわば索引として利用するにはきわめて便利である。その代わり、「犬歯・剣士・検死・検視・絹糸・健児・堅持・検事・献辞・謙辞・顕示・幻視・原子・原始・原紙・原詩・減資・言辞・現時・源氏・見識・堅実・現実・賢者・元首・原酒・原種・厳守・研修・拳銃・減収・嚴重・現住所・原住民・厳肅・検出・剣術」などと、意味の面では何の縁もない項目がずらりと並んでいるから、眺めていても風景は見えず、得たい情報にたどり着かない。

自分の表現したいことを的確に表す語群を探し出し、それを最適の一語にしぼる目的で利用するためには、音ではなく意味から引ける、まったく別の配列の辞書が必要となる。三省堂から『新明解類語辞典』と題して刊行したのは、まさに日本人が表現活動の一環として利用するという発想で編集した、ハンディーで扱いやすい一冊をめざしている。こちらは索引ではなく、いわば日本語の地図というイメージだ。愛知・青森・長崎・長野・宮城・宮崎・山形・山口・山梨などと五十音順に整然と並び、現実の地理的な位置に応じて配置したほうが国土の全体像がとらえやすいからである。

意味の類縁関係を基調として構成する類語辞典では、自分をとりまく事物や概念を含む人間の思考対象の全体像をとらえる

▼この辞典の位置と性格

行した。そもそもそういう感覚自体がとらえにくく、どうしても主観的になりやすいから、大勢で議論しても收拾がつきそうもない。そのためドンキホーテのその冒険では、約一一、〇〇〇語を対象に、つれづれなるままに自分の頭に去来する気ままなひらめきをそこはかたなく書き綴った。いつか誰かが書きとめておかないと、はかなく永久やら永遠やらの闇にとけてしまうため、一個人が奮勇を奮つてみたにすぎない。

その「永久・永遠・永劫・恒久・悠遠・悠久・とわ・とこしえ・とこしなえ」、あるいは「がつかり・気落ち・失意・失望・落胆」、「ためらう・逡巡・躊躇」、「いかる・おこる・しかる」、「びはん・めし・ライス」、「ビザ・ピッツァ」、「おしっこ・小便・しょんべん・お小水・尿」、「素つ裸・真つ裸」、「即刻・すぐ・ただちに」、「小説家・作家・文士・著作者・著述家・文筆家・ものかき・ライター」を比べてみよう。簡単に言えば、それぞれの語群で、共通する部分が「意味」であり、違う部分が「語感」である。「この辞典の位置と性格」と題し、「はじめに」のつもりで書いているこの「自序」の文章は、いつたい「序」「序文」「緒言」「はしがき」「まえがき」のどれに近いのだろうか。

以上ふれてきた辞典類のほとんどすべてが発音の五十音順に配列してある。その意味で並べ方が規則的で客観的だから、知

世界観を築き、そういうことばの宇宙を感性鋭く日本語の地図という平面上に投影させなければならない。ここでは、全体を大きく【自然】【人間】【文化】の三部構成とし、【自然】の部を(天文・氣象)【物象】(土地)【自然物】(植物)【動物】に、【人間】の部を(人体(生理)【関係】(属性)【感性】(活動)に、【文化】の部を(社会(生活)【学芸(産物・製品)【抽象】(認定・形容)にと、各六ジャンルに分け、全体で一八のジャンルを設定した。

次に各ジャンルを(天候)【現象】(地形)【物質】(樹木)【哺乳類】、(目)【病氣】(親族)【職業】(感情)【仕事】、(政治)【交通】(芸術・芸能)【食】(位置)【ひろがり】などの計一〇九の分野に分ち、それらをさらに(空)【地震】(燃焼)【地層】(島)【滝】(畑)【表情】(女)【友】(地位)【商】(味)【掃除】、(伝統)【金融】(犯罪)【道路】(橋)【信仰】(道具)【割合】など数多くの領域に区分した。最後にそれらをさらに細分し、各領域に「圧力」「名所」「若葉」「妊娠」「陰」「塗る」「配る」「リズム」「悪口」「砂糖」「塀」「時計」「前後」「度合い」「本気」「忙しい」「そして」などを筆頭項目とする、さらに多くの語群に隔てた。

この五段階の分類は、これを日本地図になぞらえるならば、地方・都道府県・市町村・丁目・番地といったレベルに相当し、めざす一語は何号といった最小の住居表示に位置するはずであ

る。要は、現実の日本語の語彙構造の幅と厚みを少しでも感動的にとらえようとする意図に発する試みである。

その結果紙面には、たとえば、「雷雨」にわか雨「通り雨」「村雨」「驟雨」「夕立」「白雨」「スコール」「照り降り雨」「日照り雨」「天気雨」「狐の嫁入り」などと並ぶ。「とぼける」「すつとぼける」「そらとぼける」「うそぶく」「しらばくれる」「しらをきる」「知らんぶり」「素知らぬ」「頬かぶり」「猫をかぶる」と並ぶページもある。もちろん「炊事場」「台所」「勝手」「キッチン」「厨房」「くりや」「調理室」と並ぶ箇所もあり、「洗面所」「化粧室」「トイレ」「手洗い」「便所」「御不浄」「はばかり」「かわや」「手水場」「後架」「雪隠」「WC」とずらりと勢ぞろいするページも当然現れる。

それぞれの単語の意味は、むろん本文中で説明してあるが、収録語数が延べ五七、〇〇〇項目にも及ぶと、細かい意味の違いや微妙な語感の差まではなかなか手が届かない。そこで本辞典の登場となる。そういう紛らわしい語群のそれぞれの意味や語感の違いと、たがいの使い分けに焦点をあてて、ことばのニュアンスをわかりやすく解き明かすが、この本の目的である。辞典と銘打つ以上、ある程度以上の語数には言及したいが、事の性格上デリケートな問題が多く、微妙な側面をさらりとふれたのでは知性にも感性にも鋭く響かない。そこで、広く全体

笑む・ほくそ笑む・にやける・やにさがる」など、【活動】の分野で、「言う・話す・しゃべる・語る・述べる」「言い合い・話し合い」「ふれる・さわる」や「会・会合・寄り合い・集まり・集会・つどい」など、【場所】の分野で、「くに・本国・自国・母国・故国・祖国」や類語辞典の紹介でも例にあげた「便所・雪隠・後架・廁・御不浄・憚り・手水場・手洗い・洗面所・化粧室・WC・トイレット・レストルーム」などをとりあげて比較した。

そして、終盤は、【物品】の分野で、「ごはん・ライス・めし」や「ピッツァ・ピッツァパイ・ピザ」や「ふみ・手紙・書簡・書翰・書状・便り・レター」など、【時間】の分野で、「永久・永遠・永劫・とこしえ・とこしなえ・とわ」や「時・時間・時刻」や「夕方・夕刻・たそがれ・薄暮・日暮れ・夕暮れ・夕間暮れ」など、【言語】の分野で、「ことば・語・単語・言語」「国語・日本語」「ふくらむ・ふくれる」「疲れる・くたびれる」「独壇場・独擅場」「一生懸命・一所懸命」などを比較検討してみた。

記述に際しては、その節で主にとりあげて論じている語をゴシック体で表示した。『新明解類語辞典』との関連に配慮し、上下のスペースにそこの語釈を転載して参考に供した。また、文意の理解をなめらかにするため、説明の文章中に現れる注意すべき語についても、解説の必要に応じて、スペースの許すか

▼この辞典の位置と性格

を眺めわたし、各分野から特に説明を要する玄妙な語群にしぼり、それぞれを個人的な感性で大胆に掘り下げ、文学作品からの実例も引きつつ、読者の関心をゆきさぶり、奥深く語りかけた。い。

一部の具体例をあげよう。まずは序盤【自然】の分野で、「宇宙・天・空・天空・天上・天国」や「春風・春一番・春荒れ・花嵐・薰風・青嵐・晴嵐・緑風・秋風・野分・木枯らし・松風・松籟」など、【人間】の分野で、「にゅうぼう・乳房・乳・乳首・乳頭・乳嘴・胸・おっぱい」や「文人・文学者・文芸家・作家・小説家・著作者・著述家・文筆家・ライター・文士・ものかき・文豪」など、【感覚】の分野で、「うるさい・騒がしい・騒々しい・やかましい」や「粹・小粋・婀娜・いなせ・乙な・味な・気が利く・枯淡・洒脱・しゃれた・こじやれた・垢抜けた・洗練された・スマートな」などを扱った。

続く中盤は、【感情】の分野で、「心・心持ち・心地・感じ・感情・情緒・心情・心理・気分・気持ち」や「大笑い・呵呵大笑・高笑い・馬鹿笑い・哄笑・爆笑・抱腹絶倒・朗笑・忍び笑い・含み笑い・失笑・思い出し笑い・照れ笑い・泣き笑い・苦笑い・苦笑・憫笑・嘲笑・冷笑・つくり笑い・そら笑い・愛想笑い・お世辞笑い・嬌笑・談笑・微笑・微笑笑・スマイル・ほほえみ・ざり同様の処置を講じてある。

前者『新明解類語辞典』に引き続き、本書でも企画から完成に至るまで三省堂辞書出版部の山本康一部長および同編集部市の原佳子さんに全面的な支援を仰ぎ、誠実に対応していただいた。この場を借りて、衷心より深い感謝の気持ちを申し述べる。

この本は、引く辞典ではなく、あくまで読む辞典を心がけた。とはいえ、小説のように最初のページから順に通読することを必ずしも期待してはいない。読者それぞれ、ふうつと心のそえられる興味深いページから始め、あちこち飛び火しながら読みあさるのも一興。いずれにせよ、稚氣まるだしの自由奔放な語りか、読者の感性にふれて、とりとめのない学術エッセイとして知的な笑いを誘うのが、著者のひそやかな野望である。

二〇二〇年三月、まさに桜の咲きはこる季節に

東京小金井市の自宅にて

中村 明

凡例

現代日本語の語彙のなかで意味の近い語および相互に関連する語を取り上げ、意味の違いやニュアンスを、文学作品等における用例を数多く引きながらエッセイ風に詳説した。

以下、概要を示す。

構成

全体を九つの章に分類し、それらを多数の節に分けて、一つの節で複数の類語を取り上げた。

本文

- 1 節のタイトルとして、その節でとりあげた「見出し語」のうち代表的な語を、冒頭にゴシック体で示した。
- 2 見出し語の表記は、一般的と思われる表記、もしくは文脈に応じて読みやすいと思われる表記とした。

引用

- 1 引用部分を「」、作品名を『』で包んだ。

注

- 1 参考のため、見出し語のうち本文中で太字にしたものについて、上下段に『新明解類語辞典』の項目を転載した。
- 2 見出し語以外の本文中に現れる注意すべき語についても、理解の一助とする趣旨で同様に同書の項目を転載した。注部分の見出しの表記は漢字で書く場合の標準的な表記を示した。本文での表記とは必ずしも一致しない。
- 3 注部分で用いた記号は次のとおり。

「」 用例 A/B/C 「A/C」または「B/C」

㊦ 主に改まった硬い文章で用いられる語

㊧ 主に口頭でくださった感じに用いられる語

㊨ 古めかしい言い方 ㊩ 俗っぽい言い方

《》 季語

異字 異読 異形 略形 表記・読み・語形に関する注記

天——宇宙・天上・天空

日本語の索引として便利な国語辞典をばらばらめくっていると、ア行・カ行・サ行・タ行・ハ行の音で始まる項目の多いことが感覚でわかる。一方、日本語の地図にあたる類語辞典を眺めていると、自然現象や自然物に関する語彙が驚くほど豊富な事実を身にしみて感じる。先祖が農耕民族だった名残かもしれないが、この方面の事物に心を寄せ、これほど細かく観察していたのかと、あらためて日本人の感性にふれる思いがする。

万物を包含するすべての広がりの意味する「宇宙」。天文学ではすべての天体を含むと考え、物理学ではすべての物質とエネルギーが存在すると規定するように、それぞれとらえ方は違っても、いずれもそういう全空間となると、なかなかイメージがわからない。ひよんなことからその宇宙のほんの片隅に住まうこととなつてもう何年も経つが、いまだに全体像を実感できないでいる。宇宙

①地表の様子を文字や記号

などを用いて一定の縮尺で表した図。「―帳」「日本―」②建物の場所や道案内のために書いた図。「―を片手に探す」「―で見

①宇宙空間に存在するすべての物。「―の霊長」

天体

太陽・月・星・地球など宇宙に存在する物体の総称。

宇宙

すべての天体を含む全空間。「―の果て」かなた」

地平線に区切られた上方の半球面。地上から見上げた空。「―を仰ぐ」「―にそびえる」「―高く舞い上がる」↑地

を見わたすことは諦め、とりあえず外を眺めてみると、頭の上に視野に入りきれないほどどこまでも「天」が広がっている。「天」という語からはすぐに「天高く馬肥ゆる秋」という常套句が浮かぶ。が、どうもこれは、中国の杜甫の祖父にあたる人の詩に「秋高くして塞馬肥ゆ」とあるのが原型らしく、収穫の秋には北方からの外敵に備えて要塞を強化せよという意味だという。

川端康成は『雪国』で、「紅葉の錆色が日ごとに暗くなっていた遠い山は、初雪であざやかに生きかえった」と記し、改行して「薄く雪をつけた杉林は、その杉の一つ一つがくつきりと目立って、鋭く天を指しながら地の雪に立った」と書いた。ここが「空」ではバランスが崩れ、スケールもぐつと小さくなってしまう。杉を介して「天」と「地」との対峙する雄大なスケールでその世界を象徴させる、一編の中仕切りだからである。

「死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ

ある特定の地上の場所。「安住の」「―現在「空き」―」

部屋や箱の中の仕切り。「―を外す」

自然▼天

天に聞ゆる」という斎藤茂吉の一首も広く知られている。死期の迫った母親の脇で深い悲しみをこらえている夜に、遠くの田んぼで鳴く蛙の音がしんと天に響くように聞こえ、心をえぐられる。水原秋櫻子に「山桜雪嶺天に声もなし」という、漢詩と響き合う一句がある。山にまだ雪の残る季節に山桜が咲きほこり、あたりがしんと静まり返っているこの雰囲気にもまた、やはりこの「天」という語がよくなじむ。ここが「空」だと、せいぜい飛行機の爆音や鳥の声が聞こえてこない程度に軽い感じとなり、いささかそらぞらしい。

「空」には低い空も高い空もあるが、空がどんなに高くても人間の生活に関連する範囲でとらえた感じがあり、「天」はそれよりもずっと高い位置に存在しているイメージでとらえられている。そのため、飛行機が上空を飛ぶ間は安心感があるが、「天」では吸い込まれてしまいそうで、地上の空港に永遠に戻れない雰囲気になってしまう。

また、シャボン玉は空まで上がれば満足するが、風となると空を越えて天までもと欲が出る。

天国 ①キリスト教で、霊となつた死者の魂が祝福される、神や天使の暮らす世界。↑地獄
②好きなように振る舞える所。「子供の」「歩行者」

超越体 人間の能力や感覚をはるかに超えた存在。

「天」には「天国」があるとき、時に「神」とも呼ばれる全能の超越体がそこを支配する、そんなイメージがある。福原麟太郎は随筆『四十歳の歌』に「人間、四十ともなれば、天から授かった才能はまずこんなものかと思いがついてくる」と書いている。だからこの「天」も「空」では代用が利かない。「天に召される」のは「天命」だから従うほかはないが、「空」に召されたのでは、途中で墜落しそうな危険を感じる。

宮沢賢治の詩『永訣の朝』は「けふのうちに／とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ／雲がふつておもてはへんにあかるいのだ」と始まる。思い出を明るくするためにあえてそんな要求をして欲しがってみせる妹に食べさせようと、「陶碗」を持つて妹の最後の食べ物となる、その「あめゆき」を取りに外に飛び出し、「どうかこれが天上

神 崇拜や信仰の対象で人間を超越している存在。「縁結び」万能の「」を「祭る」あがめる。「」のみぞ知る

天命 天の命令で巡ってくる運命。「人事を尽くして」を待つ

永訣 ①永別。「」を悼む

天上界 てんじょうがい この世で善行をした人が
や、修行を積んだ人が
天人となつて暮らす清らかな世
界。(仏教語)

のアイスクリームになつて」と祈るのだ。悲痛ながら
浄らかな雲である。この「天上」は、家の天井
ではないが、空の天井を越えたはるか彼方にある
という**天上界**をさすのだから。

「天上の恋をうらやみ星祭」という高橋淡路女の
句もある。いうまでもなく牽牛星と織女星が年
に一度だけ天の川を渡つて逢うという伝説をふま
えているが、こういう心境になるのは縁に恵まれ
ない人だろうか。それとも、恋人と別れたばかり
の傷心の人のだろうか。これが「上空」の恋に
なつてしまうと、自分を捨てて別の人と海外へ逃
避行を企てた相手に対する恨み節が見え隠れし、
すつかり現実に戻されてしまう。

「**天空**」という語は、果てしなく広がる大空を
美化して用いる例が多い。「川のふちで静かにう
ねっていた」「何万何十万もの螢火」が「はかり
しれない沈黙と死臭を孕んで光の澱と化し、天空
へ天空へと光彩をばかしながら冷たい火の粉状に

天上 てんじょう ①空の上。天空。「一
の星」②天上界。

上空 じょうくう ①空の上の方。空の高い
所。「一の雲」②ある場所
の上の空。「横浜の―を飛ぶ」

傷心 しやうしん ①悲しいことがあって傷
ついた心。「一の思い」面
持ち

天空 てんくう ①天。大空。「―を翔ける」

光彩 こうさい ①美しく輝く光。「―を放
つ」

絢爛 けんらん 美しくきらびやかなさま。
「―たる絵巻」文体「―豪
華」

なつて舞いあがる宮本輝『螢川』のフィナーレ
には圧倒的な迫力を感じる。この「絢爛たる螢の
乱舞」は「心に描いてきた華麗なおとぎ絵ではな
かった」とあるが、どこまで行つても「天空」で
あり、天上界には到達しない。そんなイメージで
日本人は使い分けているようだ。

空——大空・青空・夕空

「**空**」は地上から上方に広がる何も無い空間の
総体にあたるが、一般的な感覚としては雲より上
の部分イメージしやすく、何ものも存在しない
という点を強調し、比較的低い部分を特に「**虚空**」
と呼ぶこともある。「天」を空よりはるか高い位
置に横たわる平面上の存在としてイメージし、
「**空**」をそこに至るまでの低空から上空までの立
体というイメージでとらえる傾向がある。中原中
也の『除夜の鐘』という詩に、「千万年も、古び
た夜の空気を顫はし、／除夜の鐘は暗い遠い空
で鳴る」とある。いくら時間を経過した厳かな空

虚空 こくう ①天地間の何も無い空間。
大空。「―を翔ける」

空 そら 地球を取り巻く空間のうち、
任意の場所から見える範囲。
「晴れた―」故郷の―

気であつても、そこは「天」ではなく「空」である。

井伏鱒二の小説『太宰治と岩田九一』に、こんな場面が出てくる。家事に精を出してやつと着物を買つてもらつた青年が、すっかりうれしくなり、早速それを着て東京に出て来たところ、あいにく新宿でひどい夕立に遭つてびしょ濡れになる。結城むすぎの単衣ひとえはスルメイカを焼いたように縮み上がり、「泣く泣く小手指こてさし村に帰つて行くと、東京の方角にあたつて空に美しい虹が立っている」というのである。ここも「空」がびたりとはまる。

安岡章太郎の『朝の散歩』にはこうある。「女の高い声が、澄み切つた秋の空に響くと、私はふと母親の声を聞きつけたような、心の底に断念していたものが蘇よみがえつてくるような、そんな気がして何か恐怖に憑よかれたように、その場を足早よほに遠避とざつた」という場面だ。ここも「空」も、「天」となつては現実感が失われるだろう。

岩谷時子作詞の『夜明けのうた』が岸洋子の本

格的な低い声で「あたしの心に 思い出させる／ふるさとの空」と耳に響く。感傷の季節に望郷の思いに駆られてそれぞれが心に描くのは、「ふるさとの空」であつて、「天」ではない。

からりと晴れた秋の高い空であれ、低く垂れ下がる曇り空であれ、人間から見れば果てしなくひろびろと見えるから、すべてひっくりかえつて「大空」と呼んでいる。大都会のビル群の間から覗のぞき見える切れ切れの空であつても、それらが上でみなつながっていることを知っている人間は、けつして「小空」などとは考えない。

永井龍男の小説『風ふたたび』に「ひさしぶりの青空が見える。夜中の豪雨が、重苦しい梅雨空を、どうやら切り放したらしい」という一節がある。よく晴れて雲ひとつない「青空」として、すがすがしい気分なのだろう。

季節によつて「夏空」「秋空」「冬空」と呼ぶが、なぜか「春空」ということは見かけないようだ。

単ひとえ 裏地の付いていない和服。夏から秋にかけて着用する。
《夏》「―の着物」**異字** 単衣 ↑ 袷せわ

夏空なつぞら 「―がよく晴れた青空。《夏》「―が広がる」

秋空あきぞら 秋の澄んだ空。《秋》「澄み切つた―」

冬空ふゆぞら 冬の寒々とした空。《冬》「灰色の―」

自然 ▼ 空

大空おおぞら 大きく広々とした空。「―に舞い上がる」羽はばたく

青空あおぞら 青い空。晴れた空。「雲一つない―」「―がのぞく」

のどかな季節に風物がやわらかみを帯びて感じられるのか、「春の空円しと眺めまはし見る」という星野立子の句がある。「首長ききりんの上の春の空」という後藤比奈夫の句は、なにげなく長い首をたどって見上げた、その奥に春らしい空が広がっているのに気づいたのだろう。ともに実感を詠んだ句らしいが、いずれも「春の空」となっている。春は霞がかかって遠くの山がぼんやりと見える季節なので、「春空」と呼ぶほど季節の空という印象が鮮明でないのかもしれない。

ただし、日本人にとって新しい気持ちで迎える正月の空は格別で、「初空」という新春のめでたい気分のもつた日本語がある。小林一茶は「壁の穴や我初空もうつくしき」と詠んでいる。貧しい暮らしの象徴としてわざわざ「壁の穴」を持ち出し、そこから見えるわが家の初空も捨てたものではないと、例によつてちよいとひねくられてみせたのだろう。

初空

〔新しい気分を迎える正月の空〕《新年》「―を鶴が舞う」

夕空

いかに夕方らしい空。―を鳥が飛ぶ

打ち水

ほこりが立つのを防ぎ、また涼感を誘うために水をまくこと。《夏》「庭道」―をする

「夕空」という日本語にも日本人の感懐がこもっているようだ。星野麦丘人の「子が無くて夕空澄めり七五三」という句は、同じ境遇にある読者の共感をよぶことだろう。上村占魚に「口喧嘩やめて水まく夕空に」という句がある。耐えがたい暑さに打ち水をしているうちに言い争いになつてよけい暑くなつたのか、桶から柄杓に汲んだ水を腹いせに思いきり高く撒き、その水の行方を追う目に夕暮れのけはいの漂い始めた空が映つたのだろう。谷崎潤一郎『細雪』に出てくる平安神宮の花見のシーンも印象的だ。紅しだれに妖しく胸をときめかせながら、「門をくぐつた彼女達は、忽ち夕空にひろがっている紅の雲を仰ぎ見」て感嘆の声を放つ場面である。日本人の心を彩る日本語の美として語り継がれる名場面である。「夜空にきらめく星」だとか「夜空を焦がす花火」だとか「夜空」という語もよく使われるが、「朝空」の使用頻度は低く、「昼空」に至ってはほとんど記憶に

夜空

夜の空。「―の星」―を彩る

索引

- ・本文中、話題として取り上げた類語を五十音順に並べた。
- ・数字はページ番号、【 】は小見出しを示す。ページ番号は初出に限らない。

あ行

ア[啞]……………477	【裏日本】	あした……………602	【あした】
愛……………357	【愛情】	あす……………603	【あした】
愛する……………358	【愛情】	婀娜……………309	【粹】
愛染……………367	【愛情】	仇討ち……………428	【仕返し】
愛想笑い……………337	【笑う】	あたくし……………190	【わたくし】
愛着……………366	【愛情】	あたし……………193	【わたくし】
愛慕……………366	【愛情】	あつけらかん……………377	【すっきり】
愛欲……………355	【愛欲】	あっさり……………302	【あっさり】
あえなくなる……………187	【死】	集まり……………441	【会】
青あらし……………56	【風】	アトムに帰る……………188	【死】
青空……………9	【空】	あの世へ行く……………176	【死】
青梅雨……………33	【雨】	危ない……………674	【危ない】
青葉……………79	【木】	阿呆……………278	【馬鹿】
あかつき……………607	【夜明け】	あほたれ……………278	【馬鹿】
垢抜ける……………312	【粹】	あほんだら……………278	【馬鹿】
茜雲……………44	【雲】	雨雲……………47	【雲】
赤裸(あかはだか) ……250	【裸】	雨……………25	【雨】
赤ら顔……………124	【紅顔】	あめゆき……………41	【雪】
あがる……………170	【死】	危うい……………674	【危ない】
秋風……………57	【風】	歩む……………384	【歩く】
秋雨……………35	【雨】	嵐……………29	【雨】
秋空……………9	【空】	霰……………42	【雪】
秋晴れ……………24	【晴天】	ありあけ……………609	【夜明け】
秋日和……………22	【晴天】	ある……………652	【ある・ない】
あく[開く]……………665	【開く】	歩く……………384	【歩く】
明け方……………610	【夜明け】	淡雪……………38	【雪】
あけぼの……………607	【夜明け】	泡雪……………38	【雪】
朝顔……………534	【便所】	暗雲……………44	【雲】
朝霞……………49	【霧】	塩梅……………151	【健康】
朝風……………56	【風】	あんぼんたん……………279	【馬鹿】
朝方……………610	【夜明け】	言い合い……………394	【言う】
朝霧……………49	【霧】	言う……………392	【言う】
あざとい……………284	【ずるい】	いえ……………514	【家】
朝風……………56	【風】	癒える……………156	【治癒】
朝日……………16	【太陽】	遺骸……………114	【死体】
朝ぼらけ……………609	【夜明け】	怒り(いかり)……………346	【怒る】
朝靄……………51	【霧】	怒りが込みあげる……………346	【怒る】
味……………310	【粹】	怒り心頭に発する……………346	【怒る】
		怒りをあらわにする……………346	【怒る】